



シーガえるた アートスクール

10月9日

① 授業体験の様子。鑑賞シートの基本の流れを子どもの立場になってまず体験。

② グループに分かれて、お互いの作った読み札を当てっこしました。



③ 「シーがる・た」のルールを覚えたら、次は「美術館でシーがる・た!」。展示室にならんだ様々な作品を絵札として、読み札をつくり、カルタ当てをしました。



シーガえるた アートスクール

12月22日

① 授業の様子を持ち寄って、意見交流をしました。

② シーガルの作品を囲んで。



2007/10/09

Welcome







シーがえる た アート スクール

Segaeru ta Art School

時間	時間割	プログラム
14:00	入学式	ケロリ塾長のあいさつ 在校生と新入生の対面 ケロ先生のシート秘話
14:15	1時間目	教室でシーが <u>える</u> ・ <u>た</u>
14:50	休憩・移動	
15:00	2時間目	美術館でシーが <u>える</u> ・ <u>た</u>
15:40	休憩・移動	
15:50	期末試験	Do its best!
16:00	井戸端グログロ会議	一日の感想（その他） ケロ先生からの宿題 次回の日程 ケロリ塾長からの通信簿！

■基本的な流れ 鑑賞シート「シーガルの人間像」

シート	活動の流れ	ポイント、大切にしたいこと
<p>①</p> <p>「シーがる・た」遊びへ誘う</p> <p>5分</p>	 <p>気づいたことを言ってみて</p> <p>この作品とシーがる・た遊びをしよう。「ベンチにすわって・・・」この後にどんな言葉が入るかな？</p> <p>少しずつ違う読み札ができるね</p>	<p>「シーがる・た」遊びのルールを全員が理解できるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体の印象から出発。連想や想像も大切にする。 ・どんな着眼点も読み札になる。 ・ベンチも作品であることを知らせる。 <p>※背景を描くのも楽しい (p.3 参照)</p>
<p>②</p> <p>多様な見方を受け入れる</p> <p>20分</p>	 <p>どの絵札でつくったか当ててみて</p> <p>「サングラス 頭にのせて待っている」</p> <p>どうしてそう思ったかな</p> <p>ぴったりの組み合わせをほかにも探してみよう</p>	<p>視点によって様々な意見があることを、みんなで受け入れる場を作ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よく観察する。 ・自分なりの視点を大切にする。 ・読み手の視点に理解共感する。
<p>③</p> <p>自分も表現する</p> <p>20分</p>	 <p>読み札をつくってみよう</p> <p>グループで当てっこしよう</p> <p>お互いの見方を交流できるね</p>	<p>実際に表現してみることが、互いの見方に耳を傾ける態度にもつながります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何を言語化しようとしたのかを大切にすること。 ・ペアやグループの学習を取り入れることで交流を深めたい。 <p>※日記や、p.1の描画にも展開できる。</p>
<p>④</p> <p>作家に親しむ</p>	 <p>ほかにもこんな作品をつくっている</p> <p>インターネットで交流できる</p>	<p>作家の人柄やテーマに親しみを持つことで、自分たちの連想や解釈が、ふくらんでいきます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技法やテーマを考える場でも、自分で見出した作品の価値と、つなげたい。 ・作品との「関わり方」は、これからの鑑賞経験にも活かすことができる。

★旅する 27 人の鑑賞者に

美術作品と夢中になっておしゃべりを始める子どもたちの視線。対話型鑑賞活動に取り組みはじめた頃、絵本の読み聞かせのときに見せてくれる眼差しと似ていることに気づきました。いたずらや失敗をとことんやっつけてくれる絵本の主人公に自分を重ね、自らを解放しているときの子どもたちの眼差しです。また、作品との出会いから生まれる対話は、造形遊びと肩を並べるほど創造的な活動であり、子どもたちの成長にとってかけがえのない自己発見の場をもたらすものと感じました。そして、それは実践を重ねるほどに確かなものとなり、この活動への思いと期待は今も膨らみ続けます。

しかし、そんなすがすがしい大海原にも、にわかには宿る曇を見つけることがあります。作品との出会いから湧き出てくるものがあるのにそれを言葉にできない子や、作品を囲んでの対話に入っていくことができず思いを断念してしまう子に気づくときです。教師と 27 人の子どもたちが一緒に活動していく対話型鑑賞活動だけでは、どうしても積極的な子どもたちの見方や感じ方に統合されやすく、個々がつくりあげていく作品世界が尊重されにくいこともあるのです。

絵本の前にすわる 27 人の学級児から注がれるまっすぐな眼差し。それは、子どもたちがそれぞれの作品世界を旅している証なのでしょう。ページをめくる度に絵と言葉で道案内されるこの世界は、誰でもがエルマーになれるのかもしれませんが。ちゃんと目的地に到着できるという自信が、回り道へと足を延ばしたり迷路に侵入したりしようとする冒険心も与えてくれます。

美術作品と子どもたちが出会う場所。そこも、27 の作品世界への入り口であるはずですが。しかし、そこにあるのは、自らが道しるべを見つけて行かねばならない未知の世界です。その中を、自分らしく旅していくのは容易なことではないでしょう。けれども、その扉を開け、力強く自分の足で踏み出すことができたならば、かけがえのない自己実現の場を一人一人が手にすることができるはずですが。では、27 人の子どもたちが、自分の足跡を確かめながら、しっかりと作品世界を歩いていくためには、どのような支援が必要なのでしょう。

一つは、作品とじっくり向き合うことのできる関わり方を子どもたちが手に入れることができるようにすることだと考えました。行く先の見えない作品世界を一人で歩いていくには、不安も抱くことでしょう。せつかく扉を

開けても、そこから先の一步が踏み出せずに、困惑してしまう子どもがいても不思議ではありません。そんなとき、道しるべを探し当てることのできる関わり方を身に付けていたらどうでしょう。それが、一人一人のコンパスとなり、眼差しを注ぐ方向を示してくれることでしょう。

二つめは、一人一人の考えを伝え合うことができる小集団学習の場を大切にしていこうと考えました。小さなグループでの交流は、個々の活躍の場が必然的に保障されます。コンパスを手にした子どもたちは、きっと互いの変容を引き出すような交換・交感の場を構築していくことができるでしょう。互いの道しるべを伝え合うことで、一人では描くことのできない旅の地図を手に入れてほしいと考えたのです。

「作品世界を自分らしく旅する 27 人の鑑賞者に会いたい」その夢を実現するために生まれた鑑賞プログラム。それが、私たちが提案する「鑑賞遊び」なのです。

★子どもたちに鑑賞パスポートを

子どもたち一人一人が自信を持って、自分や友達の鑑賞世界をたずね歩いていくことのできる学びの場を生み出すために必要なもの。コンパスとなる関わり方や地図を描く交流の場を、子どもたちの自立した社会が築かれていく伝統的な遊びの中に求めていきました。かんけりやおにごっこなどの伝統的な遊びの中では、口数の少ない子や幼い妹たちも、安心して遊びの輪に入り、自分らしさを発揮しながら活動することができます。それは、遊びのスタイルを容易に模倣できるシンプルさと個々の考えや創意を認める自由さを合わせ持つルールがそこにあるからだと考えます。

ならば、模倣と創造が可能なルールを鑑賞活動の場に提示すればどうでしょう。みんなが同じルールをもつことで、自分の考えをしっかりと持つことができ、互いの思いを共感的に受け止めながら、新しい意味を生成していくことのできる鑑賞の場が生まれてくるはずですが。

「シーがる・た遊び」は、そんな願いのもとに考案された鑑賞遊びのルールの一つです。

「ベンチに座って **パスを待つ**」

「ベンチに座って **ひと休み**」。

最初に取り組むモデル学習で、作品から見つけたもの、感じたことを自分の読み札として言語化する関わり方を手に入れた子どもたちは、その後、一気に飛翔していきます。1 枚の読み札を抱いて、作品との静かなおしゃべりの時間に集中します。編まれた読み札からは、学びひたる交流の場が生まれてきます。

「シーがる・た遊び」の読み札が、自由に行き交うことのできるパスポートとなって、互いの作品世界の探検や、美術館での一人旅を楽しむ 27 人の子どもたちの活動を応援していくのです。

★コンパスを片手に足跡を

「シーがる・た遊び」から生まれた読み札には、一見突拍子もない見方と思われたものも、実は本当によく見て作られたものであることに気づかされるのが度々あります。

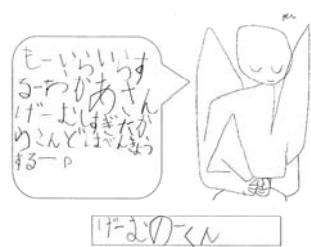
老人は誰かをずっと待っている

「ベンチにすわるサングラスの女」から、生まれたこの読み札も、その中の1枚でした。授業の終わりころ、「まだ、発表していない人がいたら読んでみて。」の声かけに励まされて披露してくれた小学校3年生の渾身の読み札です。ほとんどの子どもが、この彫刻作品に若い女性像というイメージを持っていたのか、読み終えると「えー」「不思議すぎー」という驚きの声飛び交いました。しかし、正解の絵札とその理由を知ると誰しもが納得させられたのです。無造作な石膏跡から頸骨の浮き出されてくる細い首が、確かに年輪を感じさせるものであると。

この児童は、自分で見つけたものを全身の感覚で受け止めたことでしょう。作品から見つけたことを自分の一番納得できる言葉に置き換えて紡ぎだされたのがこの読み札なのです。誰かから教えられた見方でも借りてきた言葉でもありません。自分の目に映ったものを自らの言葉で伝えようとした創造的な鑑賞活動の証なのです。そしてそれは、自分の足で作品世界を歩いたものしか残すことのできない足跡なのです。

このような足跡は、別の鑑賞遊びの中でも同じように刻まれてきました。クレーの天使に**げーむのーくん**と付けられたこの名前は、「天使

なぞなぞをしよう」という鑑賞遊びで生まれた小学1年生の児童作品です。天使の親指が、体の前に寄せられた両手から確かに伸びて



います。この小さな指の表情を、この子は見逃さなかったのです。そして伏し目がちに見えてしまう視線の先がそこにあることも。そのとき、彼はこの天使からこんなつぶやきを聞き出しています。**もーいらいらするー。おーかあさん、げーむしすぎたからこんどはべんきょうするー。**

「鑑賞遊び」というコンパスを片手に、それぞれの作品世界を歩いてきた子どもたちは、こんなふうに自分の足跡を刻んでいきます。そして心と心を重ね合わせていくこのような鑑賞活動は、こんなクレーの言葉も思い出させてくれるのです。

「芸術は目に見えるものを再現することではなく、見えるようにするものである」

★地図を広げあって

シートを開ける (pp. 2-3) と、子どもたちの様々な交流の場が始まります。

考えて考えて、石になったんだ

「これは、何番を絵札にしてつくった読み札か考えてね」教室に静かな緊張感が走る瞬間です。たった1枚の読み札が投げかけられただけで、子どもたちの視線がぐっと本気で作品にせまっていきます。見知らぬ友だちが残した作品旅行の道筋を、丁寧にたどっていきます。他者の主観的な見方に寄り添って作品へ近づくこのプロセスは、自分に見えている作品世界を疑う行為であるのかもしれませんが。しかし、どの子どもたちも探し求めているものにたどり着こうと一生懸命です。同じルールで活動していることが、作品をよく知ろうとする共感的な眼差しへと高めているのかもしれませんが。

ながいもの 頭にのせて おもたいな

子どもたちの声が一段と大きくなってくのが、このグループでの「シーがる・た」です。自分がつくった読み札を誇らしく読む子ども。そしてその声にしっかりと耳を傾ける友だち。「9番かな。え、違うの・・・」小集団学習では、限られた時間のなかでも個々が活躍できる場を生み出すことができます。互いに同じルールを共有しているために、「読み札を聞く」「作品を見る」「互いの考えを伝え合う」「読み手の考えを理解する」といった手順を踏んだ相互作用の活動を子どもたち同士で促がしていくことができるのです。

作品との関わり方を提案する「鑑賞遊び」は、このように共有する仲間たちと同じリズムを鼓動させながら、地図を広げていくような鑑賞活動が生まれます。鑑賞遊びのルールが友の見方を受け入れようとする土壌やそれを豊かに耕していくルーチンも育み、主体的な鑑賞活動を支えてくれているのです。

★美術館での旅立ち

鑑賞遊びの目的と方法を手にした子どもたちが、新しい作品との出会いを求めて訪れた美術館。お気に入りの作品と向かい合うその眼差しは、声をかけるのもためらってしまうほど真摯で、しかも自信に満ちています。

自らが求めた作品世界の中で学びひたる子らと出会える美術館での旅立ちこそが、この「鑑賞遊び」の真骨頂なのかもしれません。創造を友とする27人の鑑賞者が、きっとそこで待っていることでしょう。